

たゞし「すぐりとすぐ」とは互に相響きあひたる點は注意すべし。また昌保氏の書入に「たが戀ひすぐやのく」はるを通はして誰戀爲哉也とあれどもやいかいなり。「すぐ」は「過ぐ」の意に取る方穩當なるべし。

小由流木

こよろぎの磯立ちならし、磯ならし、菜摘む、めざしぬらすな、ぬらすな、沖にをれ、をれ波や、ぬろくも、きみがめすべき、めすべき、菜をしつみ、摘みてハヤ。

○この歌は古今集の東歌のうち相摸歌に「こよろぎのいとたちなりし磯菜つむめさしぬらすな沖に居れ波」とあると同じ種類の歌にて當時かゝる歌の別に行はれしものなるべし。○こよろぎ。こは和名抄に見えたる相摸國餘綾郡餘綾枝のうちの地名なるべし。大よろぎ小よろぎなどありしならん。○磯立ちなりし。常に磯邊に立ち出て、馴れたるさまをいふ。○めざしぬらすな。童女を濡す勿れとなり。めざしを童女といふゆゑは既に神樂歌の朝

倉或説に「朝倉やちめの湊に網引をればあまのめざしになびきあひにけり」と見えたる條に述べ置きしが如く童女の髪はいと短く恰も人の目を刺すが如くなればなりとなり。○沖にをれ波や。波よ沖に居りて濱邊に来ること勿れと命令したる意。○ぬろくもきみが召すべき菜をし摘みてはや。濡れつゝも我が君が聞召すべき磯菜を摘まんとなり。はやは感歎辭なり。「摘みて」の下に「居らむなどいへる意を含めり」と見るべし。こは童女の「前節」の歌に答へしものとして作りたるなり。○一首の意は小餘綾の磯邊のほとりを立ち馴らしつゝ、磯菜摘み居る處女よ必ず君などに上るべき料のものと摘むならむ、さるに折りく磯邊に立ちさわぎ來て童女を驚かすなる片男波の心なさま、いまし若し省る處あらば沖邊を遠く去りて再び妨げに來ること勿れと波浪に命ぜしに童女これ聞きて御心のほどいとありがたけれどわれは大君の爲めに磯菜を摘み居るなれば打ち寄する波に袖濡らすほどの事は賤の身に少しも厭はじ、御心安くおぼしてよなど答へしさまなり。この歌波を擬人したるはた童女の磯邊に立ちて菜摘むさまおもしろき情景といふべし。

玉垂

たまだれのをがめをなかに据ゑて、あるじはもや、さかなまぎに、さかなとりに、こゆるぎのいそのわかめかりあげに。

○たまだれの。玉垂のにて玉にて飾れる籠をいひこゝにてはをがめの緒の枕詞に用ゐらる。○をがめをなかに据ゑて。小瓶を家に据ゑ置きてなり。○あるじはもや、さかなまぎにさかなとりに。その家の主人は肴を求めに魚取りにの意なるべし。酒の肴として魚を捕獲し行きしを云ひしなり。○こゆるぎの磯のわかめかりあげに。小餘綾の磯邊に漂へる若布を刈り舉げにゆきたりとなり。○一首の意は今宵の飲料として一瓶の酒を買ひ置きて自からその肴を得んと思ひてその家の主人は網など持ちて小餘綾の磯邊を魚又は若布などを取りに出かけしとなり。これはそのほとりの漁家などのさまを詠じたるものなるべし。思ふにこの類の歌は思想として夫眞爛熳文辭としては輕妙圓轉實に上乘の美的製作物といふべし。吾人はむしろ名たゝ

る歌人の傑作よりかゝる自然なる聲調を愛す。

鴛鴦

をしたかべ、鴨さへ來るる原の池のや、玉藻はまねなかりそや、おひもつくがにや、おひもつくがに。

○をしたかべ。鴛鴦をいふ鴛鴦は誰れも知る水鳥なれとたかべは罕れに聞く處なり。和名抄に鶺鴒。爾雅集註云、鶺鴒音翻一音施、一名沈身、貌似鴨而小脊上有文とあるにて悟るべし。○鴨さへ來る。鴛鴦鶺鴒などの群り居る上に鴨までが來りしとなり。○原の池のや。原の池の玉藻とつく詞なり。原の池は池の名なるべけれども今はいづれとも明かならず。もしは名たる池の通稱にて野原にある池といひて辨知せられし者なりしか。○たまもはまねなかりそや。玉藻は刈り取ることなかれとなり。まねは眞實の意なりと風俗歌考にいへり。この語、その他の文に見えず。なほ考ふべし。○おひもづくかにや。その玉藻の生ひ續くやうにの意。「がに」は「がね」と同じく動

詞に付く接尾語にて之を副詞句とするものなり。○一首の意は見渡せば原の池の玉藻の間に鴛鴦、鴈、鴨などかいと樂しげに浮みつゝあり。人々よ、玉藻など刈り取らずしてますく、生ひ繁げるやうにして給はれとなり。この歌何か戀愛上のことをおほまかにうたひしものなるべし。たゞし又一篇の叙景詩としてもまことにあもしろき格調なりといふことをうべきものなり。

之太乃浦

しだの浦を、あさこぐをぶね、さし寄せよ、われさへ乗りてな、しだの浦を見むや。

○しだの浦。これは駿河國の志太郡の浦なるべし。萬葉集十四に「しだの浦をあさこぐ船はよしなしに漕ぐらめかもよなしこざるらめ」とあるも同じ國の浦なり。○あさこぐ舟さしよせよ。朝早く沖邊へ漕ぎゆく舟を磯邊にさし寄せよとなり。○われさへのりてな志太の浦を見んや。志太の浦遊覽の人々のうちにわれも加はりて浦邊の朝景色を見飽かさとなり。「のりて

な」のは感歎辭なるべし。○一首の意は明かなり。これも戀歌にて妹に別るゝときその乗りし舟を追ひて共にしはしがほどにても浦邊の景色など打ちながめて心を慰めんといふやうなる場合なりしやも圖られず。しかし叙景の歌としても十分感興を惹くに足るべく又いかに志太の浦の風景の面白かりしかをも想像せしむるをうべし。因に云ふ、この歌、神樂歌の「階香取」の歌にその趣いとよく似たり。末の歌に「若草のや妹も乗りたりやアイソ我れも乗りたりや舟かたぶくな舟かたぶくな」とあり。「神樂歌評釋」を参照すべし。

君乎置天

きみを置きて、あだし心を、我が持たばや、ナヨヤ末の松山、波も越え、越えなむや、なみも越えなむ。

○この歌、古今集の東歌のうち陸奥歌に「君を置きてあだし心をわが持たば末の松山波も越えなむ」とあると同じものなり。この歌を本として詠める歌いと多きがなかに源氏浮舟巻に見えたる「波こゆる頃とも知らて末の松まつら

んとのみ思ひけるかな(蕉)又後拾遺集戀部に收められたる契りさなかたみに袖をしぼりつゝ末の松山波こさじとは(清原元輔)などは有名なるものなり。○きみを置きてあだし心をわが持たば。わが戀しく思ひまゐらす君を外に置きて異心を別に懐くが如き事あらばの意。○末の松山波も越えなむや。末の松山といふ山奥までも磯に打ち寄する波が立ちさわぎ來て越ゆべきなりとなり。即ちさる處まで波の越え來ることなき筈なればわれの君に對して他心をいなくことあらじとなり。末の松山につきては諸説あれど能因歌枕によるをよしとす。その説によれば本の松中の松末の松とて三重にありきといふ。今これによりて考ふれば末の松山とは最も海岸に近き山なるべし。この山隨分には高き山にてありしかばその頂を波浪の越えしとは想像の外にありしなるべく、かくて女が男に對して決して他心なきことの誓ひの堅さに譬へしなり。古今集遠鏡には末の松山といへるは末といふ所の松山なるべしといへれどいかゞあらむ。されどもと海岸よりの遠近の距離によりて本中末といひ來りしを後らには末の松山といふ名所となりしといふこと

はいはいはるべきなり。○一首の意はもとより明かなり。この歌の着想まことに斬新にして古今集中異色あることは諷誦のうち自から感得せらるべし。因に云ふ、狂言小歌に末の松山さゝら浪は越すとも御身と吾とは千代經るまで。また隆達節唱歌に末の松山さゝなみはこすとも御身とわれとは千代をふるまでとある皆な同じ類なり。

越方

をちかたやかのかたや、安達の原にたゝるからに、
たゝるからに、うわるからに、おのをによする、さぬとしなくに、
よせばよせよせばよせよそふる人の、憎からなくに、

○をちかたやかのかたや。遠方や彼方やなり。これは同じ意を繰返したるにて眞淵の説の如く遠近といふほどにもあらじ。○安達のほらに。陸奥國名取郡安達原をいふ。をちかたかのかたとは安達原を漠然と差して謠ひいてたる也。神樂歌採物弓の末にみちのくのあだちの眞弓われ引かばやうや

うよりこしのびくにとあるもこの安達原にて古しへより弓の名所なるなり。また謠曲に「安達原」といふ曲あり。○たゝるからにうわるからに。その安達原に樹木の生ひ立つ故に又植ゑられて繁茂する故になり。「たゝる」うわるの動詞はちもしろき遣ひ様なり。語學者の好箇の参考とすべきものなり。○おのをはちのれが岑の意にて樹立の生ひ繁けるといふ處よりやがて山にかけ岑と用ゐ來りしなり。またおのをは下の詞にかゝりて己が男の意となる。さて「をちかたやよりたゝる」からにうわるからに「までは」おのををいはんが爲めの序詞なりといふべし。○よする。寄するよの意。即ちある男を此女と關係あるが如く他人がいひ寄するよ少しも跡方もなき事なるをの意。○さぬとしなくに。其男と共に寐たるとあらぬにの意。「さぬ」のさは接頭語「し」は例の強辭なり。○よせばよせ。其男と我と深き契ありなどいふ人あらばまゝよ思ふまゝに浮名を立てよといふ強き意味なり。○よそふる人のにくからなくに。わが戀人なりと寄せらるゝ男は我は悪しうは思はぬ人なるものをの意。○一首の意は我里の邊にいと優しき人います、里人ゆくりな

くもわれその君と相契れりといふ。われ固より深窓に人となりて双親の教訓いと嚴しき身なれば斯る浮名を立てらるゝとのいと迷惑なれど今はさならずと手を盡して云ひけつとも其甲斐あらじ。(われ其君と共に寐たるとなしなどいふとも噂いと高ければ言ひ解くと難かるべし。)まゝよ浮名の立てば立てわれも彼君の風姿に心惹れぬにもあらぬものを——もし此事がうつゝとしもならましかばいかに嬉しからましなどいふとなるべし。此歌の思想は、松の葉に見えたる琉球組のうちのとても立つ名が止まばこそ、こちへ御寄りやれのう、柴垣ごしに、もの言はうなど、同巧異曲の者なりといふべし。

小車せくるま

小車にしきのひも解かむよひりを忍ばせや、よやなわれしのばせよ、我れ忍ばせ、
 そよまさになてけらしえ、月の面を、さわる雲のまさやけく見ゆ、
 こさやけく見ゆ。

○小車にしきのひも解かむ。小車の「を」は接頭語なり。小車錦とは黄色の錦に黒繪の小車の模様あるものをいふ。さてこゝはたゞ錦の紐解かむの意にて妹と打ちつくろぎて逢ひたしとの心なり。錦の紐などあるにて其妹の好き身分なるを知るべし。○よひりを忍ばせや。よひりは宵の意。「り」は接尾語にて「夜らのら」など、等し。「今宵忍ばせよ」のこゝろなり。○よやな。拍子詞なり。○われしのばせよ。前句の意味を繰返したるにて「我」の語を點出してなほ確實に主語を指示したるなり。○そよまささ。これは「風俗歌考」にある如く「夫れよ正しくの意なるべし。○ねてけらしも。その家の人の皆な寐ねたる様子なりとなり。古今集貫之の歌に「櫻花さきにけらしも足引の山のかひより見ゆる白雲」とある「けらしも」と同じ意にて想像辭なれども深く斷定して表示したるものなり。○月の面をさ渡る雲のまさけく見ゆこさやけく見ゆ。月の面さへ雲の立ち隠すが明かに見ゆとなり。村雲の月光を蔽ふが明かに見ゆとはやゝ新奇なる表彰法なれども月面の全く雲に隠されんとする有様を雲の方面より叙したる者と見るべし。「さ渡るのさ」まさやけくの「ま

またこさやけくの「こ」などいづれも例の接頭語なり。○一首の意は今宵何卒われをして妹が家に忍ばしめよ積る話などして心のうさを晴らしたきものよ、かく思ひつゝその家近く立ち寄りしに家内の人々は早や熟寐をむさぼるにやあらむ四邊いと静かなり、この事既におのれにいと幸なるに折しも皓々たりし月影は村雲に遮られていと暗うなりぬ、あはれ皇天のみめぐみのありがたさよなどいふことなるべし。伊勢物語に見えたる業平の歌に「人知れぬ我が通路の關守はよひくごと」に打ちもねなむとあるとはやゝ異なれどその願ふ所や同じかるべし。月に村雲の意は端唄などにその例多し。

陸奥

アハレヤあぶくまに霧立ち渡り明けぬともせなをばやらじ待てばすべなしや。

○この歌古今集に陸奥歌とてあぶくまに霧立ちわたり明けぬともさみをばやらじまてばすべなしとあると同じものなり。○あぶくま。阿武隈と書き

磐城岩代兩國を貫流し陸前磐城の國境を経て海に注ぐ川なり。○霧立ちわたり明けぬとも。朝霧立ち籠めて夜は明たりともこのころなり。空白み渡りて曉霧川の面を霞む景色などをいへるものなるべし。○せなをばやらじ。昨夜より通ひ來りたる夫の君を返へしやるまじとなり。さぬくのわかれを惜めるさまなり。○待てばすべなしや。夫の君のまたも來ますべき折を待たんはせんすべなきほどいと苦しきものをの意なり。○一首の意は朝霧阿武隈川に立ち渡りて夜は將さに明けんとすればわが愛しき夫の君は人目にかゝらぬうちに歸へりなんとし給へど又の逢瀬を待たんほどのいとつらければいかてかうべなひやらんなどいふことなるべし。伊勢物語に見えたる夜も明けばさつにはめなんくだかけのまだきに鳴きてせなをやりつる、神樂歌の酒殿歌或説に見えたる庭鳥はかけると鳴きぬなり云々、又催馬樂歌、律のうちなる「鷄鳴」の曲などは皆なこの篇と同じく後朝の戀情を描寫したるものにて共に俗謠の體にする體上なり。

甲斐

かひがねをさやにも見しがやけ、れなく、け、れなく、よこほり立てる、さやの中山。

○この歌古今集東歌のうち甲斐歌とて「かひがねをさやにも見しがけ、れなくよこほりふせるさやの中山」とあると同じものなり。○かひがねをさやにも見しが。甲斐が嶺をさやかに見たきことよの意。○け、れなく。心なくなり。東國の方言なるべし。○よこほり立てるさやの中山。横はりて甲斐がねを立ち隠す意地わるき小夜の中山よとなり。小夜の中山は遠江國の佐夜郡にある有名なる山なり。西行法師の歌に「年老いてまた越ゆべしと思ひさや命なりけり小夜の中山」とあるは皆な人の知る所なり。○一首の意は明かなり。甲斐の國人の遠江國などに旅してその故郷なる甲斐が嶺の見えずなりたるを慕ひて詠める歌なるべし。特に巧緻を弄せざれども俗韻卑調のうちにいひしらず面白き節を含めり。

常陸

筑波嶺のこのもかのもにかげはあれどや君がみ影に増すかげも、ますかげもなしや。

○この歌も古今集東歌のうち常陸歌につくばねのこのもかのもに影はあれど君がみ影に増すかげもなしとあると同じものなり。○筑波嶺のこのもかのも。筑波山の此面彼面いづれにも木影いと繁けれど意なり。筑波山は常陸にありて眞壁新治兩郡に跨れる高山なり。○君がみ影に増すかげもなしや。君の恩恵に増す影は筑波山になしとなり。○一首の意は常陸なる筑波山は關東有数の高山にて樹木鬱蒼として緑陰いと深かれどわが大君の山と高き海と深き大御恵のみ影に較ぶれば日を同じうして語らずとなり。古今集序にもこの歌の意を取りて、廣き御恵の陰つくば山の陰よりもしげしとあり。古しへより名高き木蔭なりけらし。

おなじく

ひたちちにも、田をこそ作れ、あだ心や、兼ぬとや君が、やまを越え、野

を越え、雨夜行きませる。

○ひたちちにも田をこそ作れ。常陸國にて田圃耕作にいそしみ居るにの意なり。眞淵翁の説の如くこの一句は次のあだ(吾田)をいはん爲めのみ序詞なりといふはよからじ。兩様の意味を表彰するに用ゐしものと見るべし。○あだ心や兼ぬとや君が。然るにこのれが仇し心を持ちたりとやうに考へ給ひて君がの意なり。○山を越え野を越え雨夜行きませる。野山を越えてしかも雨夜にさへ異妹がり通ひ給ふよとなり。○一首の意はこのれはわが夫の君の爲め朝夕田畝に出て、いそしみ勉むるにいかなる思ぼしたがひにかのれ仇し心を持ちたりとて空聞を守らしめ給ひて野山幾里の道を雨の夜深く妹がり通ひ給ふうたてさよ希くば早く御怒を解き給ひて閑室及び談笑の快を取るを得んとなり。

筑波山

つくば山は山しげ山繁けきをぞや、たが子も通ふな、下にかよへ、

わが妻は下に。

○つくば山は山しげ山。筑波山の端山繁山なり。端山は外山と同じく眞山に對して里に近き低き山をいふ。繁山は木滋げき山にて奥山をいふなるべし。ま山と山の解は神樂歌評釋のうち庭燎の條を見るべし。○繁げきをぞやたが子も通ふな。その繁き山を誰の子も皆なよく通ひゆくよのこゝろなり。○下にかよへわが夫は下に。わがはしき夫は下より靜かに通ひ給へとなり。誰が子も通ふとはこれまでかの山を通ひ來て浮名の立ちし男などのさはにありしなるべし今それに對して靜かに通ひ給へといふなり。○一首の意はわが夫の君よ筑波の山はいと木深くはあれどこれまで通ひ馴れ浮名の立ちたる男の君も多かるを君は人目立たぬやうわが宿に通ひ給はらずや御もてなしなど仕うまつるべき用意など心を碎きてしつらひ置きたるになどいふことならむ。尤もこの筑波山云々は下に通へといはんが爲めに用ゐたる序詞と見ても差支なかるべし。新古今集戀源重之の歌につくば山はやましげやま繁けれど思ひ入るにはさはらざりけりとあるはこの歌によりたるものなり。

りたるものなり。

月面

月の面をさわたる雲のまさやけく見ゆなばのつぶら江の秋なれば霧立ち渡るなばのつぶら江。

○月の面をさ渡る雲のまさやけく見ゆ。玲瓏たる月の面を立ち隠す村雲が明かに見ゆとなり。この句「小車」の篇に見えたり。参照すべし。○なはのつぶら江秋なれば霧立ち渡る。時は秋なればつぶら江に霧立ち渡るとなり。「なはのつぶら江は今いづこなるか明かならず。たゞしつぶら江とは昌保の説の如く圓なるをつぶらといへばつぶら江はまろき形の川と見ゆつぶさともつぶらかなどいふも圓なるかたちより出でし意なり」といふ意味なるべし。たゞし必ずしも川ならずしてもよかるべし。湖水にてもまた灣曲せる海邊にてもよきなり。○一首の意は村雲立ち出で、船々たる月影を隠したれどなはのつぶら江のわたりは秋霧立ち籠めてその景色いひしらずをかしたな

り。月色朦朧として秋風身に沁むの夜、ひとりなはのつぶら江のほとりを道
遙して濃霧水面を蔽ひたるを見て諷詠したる情懷自然にしておもしろし。
この歌「小車」の篇と次に見ゆる「なはぶりの歌」とを合せて後に作られしものな
るか。

大鳥

おほとりの羽根に、ヤレナ、霜降り、ヤレナ、誰れかさいふ、千鳥ぞ
さいふ、かやくきぞさいふ、みとさきぞ、みやこより来て、さいふ。

○おほとりのはねに。おほとりは和名抄に「本草云鶴音館和名水鳥似鶴而巢
樹者也」とあり。この「おほとり」はこの鶴なるべし。○ヤレナ霜降り。そ
の羽根に霜の降りたるをいふ。ヤレナは音調上の詞にて意なし。○誰れか
さいふ。その報告をなしたるは誰れぞと反問する意なり。この疑問は擬人
法的に用ゐられしなり。○千鳥ぞさいふかやくきぞさいふ。この事は千鳥
もしいひまたかやくきもしいひとなり。かやくきは和名抄に「唐韻云

鶴音館和名雀鷓久木小鳥也」とあるにてその大概を悟るべし。○みとさきぞ都よ
り来てさいふ。蒼鷺も都より来りてこの事を告げたりとなり。みとさきは
同じく和名抄に「崔禹錫食經云鷺又有一種相似而小色蒼黑並有水湖間漢語抄
佐木」とあり。○一首の意は鶴の羽根に霜が降りたりといふいとめづらしき
ことなればその事は誰れが云ひしぞと問へばその仲間なる千鳥もさ云ひ雀
鷺もさいひ殊に都なる蒼鷺もわざと飛び来りてさいひたりとなり。この
歌まことに超脱にして洒落諷刺詩の上乗といふべし。惜いかな時世隔離し
てその真相を捕捉するを得ざることを。かの催馬樂歌に見えたる「老鼠」無力
蝦など異曲同巧のものなるべし。

奈末不利

なばのつぶら江の春なれば霞みて見ゆるなばのつぶら江。

○奈末不利は「なばぶりの轉訛なるべし。ま」とばとは相通ずる音なればなり。
「ぶりは夷曲」宮人振などの「ぶりにて風調」の意なるべし。こはなばのつぶら江

の邊にて詠れしものなればしか名づけしならん。○春なれば霞みて見ゆる。陽春の候なればなばのつぶら江も霞が棚引きたりとなり。このところ風景おもしろかりければ四時雅客のおとづれ絶えざりしならんも殊に春秋の眺望はいみじかりしなるべし。○一首の意は月面の篇に準へて知るべし。

荒田

あら田に生ふるとみ草の花手につみれてみやへ参らむなかつたへ。

○あらたに生ふる。新たに耕したる田に生ひたるなり。○とみ草の花。富草の花にて靈草又は吉上草といふものゝ花なり。その花を寶相華といひこれをうれば貧家忽ちに富豪となるといふ。また稻のことを富草といへどこゝにては取らず。○手につみれて。手につみ入れてなり。「アイウエオ」の母音は略さるゝこといと多し。短歌の字餘りとしてこの五音を許せるは諷誦の間自から聞えねばなり。○宮へまゐらむ。その吉上草の花を持ちて宮参

りしてなほ利運を祈らましとなり。○なかつたへ。この詞の意明かならず。「サキングチャ」などゝ同じほどの意なるべきか。○一首の意はもとより明かなり。

安豆未知

あづまぢに、かるかやのよこほちになさけをかいかるかやの見ねばや、こともやすらに、かるかやのしさや、かいかるかやの。

○あづまぢに。かるかやの。「東國にて苳る萱」なり。また、かるかやのは下につききて苳萱の意となる。苳萱は秋草の一なり。○よこほちに。横小路になるべし。音韻の轉訛なり。○なさけをかいかるかやの。情を掛けかるかやのなり。○見ねばや。苳萱のいやが上に生ひ繁げりたる小路なりければ人に見咎がめられざればの意。「やは添へたるまでにて意は輕し。○こともやすらに。その事もいと安らかにて浮名も立たざりきとなり。○一首の意は東國の苳萱の生ひ繁りたる横路にて愛しき妹と逢ひしに人目にかゝらず

して心安かりきとなり。

菅牟良

すがむらのや、ハレ、小菅村のや、むらのや、菅村のや、おひては、われこそかい、刈らめ。

○すがむらのや。菅の生ひ繁り糞りたるをいふ。小菅村もその意に大差なし。○ハレ。拍子詞にて「ハレ」の上略なり。前にしばく見えたり。○おひては。繁茂したるならばの意。○われこそかい、刈らめ。おのれこそまづ第一に掻き刈るべけれとなり。○一首の意は菅村が生ひ繁げらばわれさきに刈り取りたしといふを表面の意味としてその真意は萱を少女にたとへてかの少女が野邊に生ひたる萱の繁茂する如く生長せばわれまづかの女を獲たしとなり。この歌戀情をやるに露骨ならずしかも自然にしておもしろし。俗謡のよろしきものといふべし。萱を妹に譬ふことは万葉などにその例多し。万葉卷十一に「三島菅未だ苗なり時待たば着すやなりなむ三島菅笠」と

ある、その一例なり。

知々波々

ちゝはゝが門にうそぶい、まるこそ立てれ、てうどをひさげて、などかはや、立てりしもせざらむ、おのれかや、いとこめのかどにて、うとをひさげて。

○ちゝはゝの門にうそぶい。兩親の門のほとりに嘯きての意。○まるこそ立てれ。われこそ立てれとなり。まるは自己を卑稱していふ詞なり。○てうどをひさげて。調度を擧げてなり。調度は弓矢などをいふなるべし。○などかはや立てりしもせざらむおのれかや。いかでかわれは「立てり」といふことをせざらんとなり。即ち立つことをうべしとの意。「立てり」といふ詞を主語としたるはおもしろし。○いとこめのかどにてうとをさげて。わが妹の門に調度を擧げてなり。「いとこめは親しき女の意なるべし。いとこめは神樂歌の篠波の條にいへる如く「いとほしき子のこゝろならむ。いとこめ

と熟語になりては、いとこはたゞ親愛の意となるべし。○一首の意はわが父母の門の邊に狩裝束して立てりしことは常なりけるものを、などかこの姿にて妹が門邊に立ちよりて音づるゝことを憚かるべきかとなり。

我門

わがかどのや、しだらこやなぎ、サハレ、トウトウ、垂る小柳、しだる
かいてば、ナヨヤ、垂る小柳、
しだるかいてばや、國ぞ富みせむ、郡ぞ榮えむ、里ぞ富みせむ、わい
へぞ富みせむや、垂る小柳。

○わが門のやしだら小柳。わが門邊に垂れたる柳なり。○サハレトウトウ。「サハレ」は「アハレ」など、同じく拍子詞「トウトウ」は笛の譜なるべし。○しだるかいてば。垂らかしたるならばの意。○國ぞ富みせむ郡ぞ榮えむ里ぞ富みせむわいへぞ富みせむ。上は國郡より下は一家に至るまで富み榮えむとなり。○わいへは我が家をいふ。○一首の意はわが門の垂れ小柳の緑いと青々

としてまことに賑かなり、若しこれになほつちかひて至る處に垂らしたならば國郡より始めてわが里わが家まで榮えむかとなり。この歌、備馬樂歌の「大路と葛城」とによりて作りしものにあらずや、とおもはる。「大路」の青柳がしなひを見れば今さかりなりや、といへるまた「葛城」のしかしては國ぞ榮えんやわいへらぞ富みせんや、といへる、いとよく似たりといふべし。兎に角に新柳煙ぶるが如き風景は國郡の繁榮を示すものなれば、眞淵の説の如く柳の緑深きことをいひて土地繁昌の齋ひ言に述べしならむ。さてこゝにては單に右の如き意味にて別に「葛城」に於ける白壁王の如き複雑なる童謠にあらざるべし。

伊勢人

伊勢人はあやしきものをや、などて小舟に乗りてや、波の上を漕ぐや、なみのうへを漕ぐや。

○伊勢人はあやしきものをや。伊勢人は柔弱にして雄々しからぬものをの意。こゝは伊勢人は僻言しけり、又、なにはのあしは伊勢の濱萩などいふこと

によりて伊勢人の無能なるさまをいひしなり。○小舟に乗りてや波の上をこぐや。輕舟に乗じて海上を漕ぎゆくよの意にてその元來の性格と異りて勇敢の働をなせることを驚歎せりしなり。○一首の意はもとより明かなり。

加比加禰

甲斐がねに白きは雪かやいなをさのかひのけごろもやさらすてづくりやさらすてづくり。

○甲斐がねに白きは雪かや。甲斐の嶺に遙かに白く見ゆるは雪なるかとなり。やは感歎辭なり。○いなをさのかひのけごろもや。否か諾か否な決してさにあらず甲斐人の常に着馴らす襲の衣なりとなり。神樂歌の「弓立に里神はよき日まつれば明日よりはあけの衣をけごろもにせん」とあると同じものなり。「いなをさはいなをか」の轉訛にて万葉集卷十四東歌に見えたる常陸國歌に「つくばねに雪かも降らるいなをかもかなしきころがにぬほさるかも」とあるものによれり。而してこの篇全體の趣向もこの歌より取り來りしが

如し。またいなをかよりかひにかけしは岡といふ縁なり。○さらすてづくり。晒らす手作りにて今の手織をいふなるべし。即ち白き布ならむ。○一首の意は甲斐が嶺に見ゆるは雪なりや否か諾か今は夏の初めなればしかにはあらずおもふに甲斐の國人のよく晒らすなる平服の單衣ならむ手織りの白衣ならむとなり。けごろもといふも手づくりといふも同じことを繰返したるまでなり。

奈利高之

一段

鳴高しやなりたかし、大宮ちかくて、なりたかし、アハレノなりたかし

二段

音なせそや、おとなせそ、

三段

あなかま、これはもや、みそかなれ。

○大宮ちかくて鳴高し。禁中に近き處にて騒々しとなり。○音なせぞ。音響をたつること勿れとなり。○あなかま。あゝかしましといふ意。○これはもやみそかなれ。是れ！静かにあれとなり。これはもやはこれに同じ。はもや皆な添辭なり。これはその人を指示して制する詞。○一首の意は音高しく、内裏近き處にて亂雑なる響を立つるは恐れ多きにあらずや、あゝやかましく、これく密かに静かにあれとなり。これはおもふに近衛の樂人などの御神樂にめされしほどのことをうたひしものなるべし。公事根源の内侍所御神樂の條に「前略本末の座二行に設けたり、近衛の召人うしろにあり、人長末に横座なり、次第に座につく、人長進みて膝突などしかせ鳴高になどいまして、次第にめす、笛和琴拍子本にさぶらふ、末の拍子筆策は末につく、和琴は位によらず、本の座の上に着す云々」とあり、参照すべし。

八乎止女

一段

八をとめはわが八少女ぞ立つや八をとめ、たつや八をとめ

二段

神のます高天原に立つや八をとめ、立つや八をとめ

○八をとめはわが八をとめぞ。その八人の天つ乙女はわが親愛なる天つ乙女なるぞとなり。○立つや八をとめ。その乙女たちが翩々として踏舞することをおひたるなり。○神のます高天原に立つや八乙女。神明のおはします天上にて天つ乙女の舞ひ奏づるよとなり。○一首の意はいま虚空より舞ひ下りたる天つ八少女はわが親しき天人よ、その八少女の飄々として軽くまひ遊ぶさまの美しさよ、第一段天人の音楽も時過ぎたればにや天つ八少女は空高くまひ上りぬおもふに神たちのまします高天原にて美しき舞と清き樂とを繰返し居るならむ、第二段となり。これに類することわが國に古くより傳説あり。かの丹波國比治山に天女七人舞ひ下りしことあり、又駿河國三保松原にも天の羽衣の話あり。案ずるにこの歌の如きも或はこれらの傳説に

基づきて作られしものならむ。

彼の行

かの行くは、かりかくゞひか雁ならば、ハレヤ、トウトウ、雁なら、なのりぞせまし、なをくゞひなりや、トウトウ。

○かのゆくはかりかくゞひか。御空高く飛び行くは雁なるか鶴なるかとなり。○ハレヤ、トウトウ。ハレヤは拍子詞、トウトウは笛の譜なることは既にいへり。○雁ならなのりぞせまし。もし雁金ならばかりくゞと鳴きゆくならむとなり。○なをくゞひなりや。やはり鶴なるなからんやの意。「なを」は「なほ」の假名違ひなるべし。○一首の意は明かなり。黄昏の頃大空高く飛びゆく鳥をなかめて疑問を發する所、稚氣ありておもしろし。吾人は此の如き天真爛漫なる俗謠をよろこぶ。

宇婆良古支

うばらこきの下には、鼈笛吹く、猿かなづ、いなごまろは、拍子うつ。

きりくすは、鉦鼓打つ。

○うばらこきの下には。荆棘垣の下にはなり。○鼈笛ふく猿かなづ。鼈が笛を吹き猿が舞ふとなり。○いなごまろは拍子うつきりくすは鉦鼓うつ。蚱蜢(和名シャウリヤウバツタ)は拍子を取り蟋蟀は鉦鼓を打つとなり。鉦鼓とは雅樂に用ゐるものにて「からかね」に作りたる鐘にて打ち鳴らすものなり。蟋蟀の聲のよく之れに似たればかくいふなるべし。○一首の意は荆棘の垣の下に鼈笛吹いて笛吹けば猿それに合はして舞ひ躍る、稻子麿が拍子を取れば蟋蟀は鉦鼓うつよ、そのさまのいとおもしろしとなり。さてこは表面の意味なれど何事か裏面に諷する處などあるなるべし。今も民間に鼈さわけば善き事なしといへば何か凶兆を表示したるものか。要するに「神樂歌」の「笹」の如くまた催馬樂歌の「無力蝦」の如く或る意味を表彰したりしものなりけんも時世隔たりて今は何事とも得解きがたきものとなりしなるべし。

乎之高倍

諸物評釋

風俗歌 彼乃行 宇婆良古支 乎之高倍 多々良女

をしたかべ、鳴さへ來ぬる、原の池に、生ふる玉藻はや、よき草の、ゆかりぞや、まねな荇りそや。

○この歌、大方「鴛鴦」の篇に同じ。○よき草のゆかりぞやとは善き草に縁ありといふ意なり。要するに玉藻はよき水草なれば決して荇り取ること勿れとなり。○一首の意は「鴛鴦」とさしたる相違なし。参照すべし。

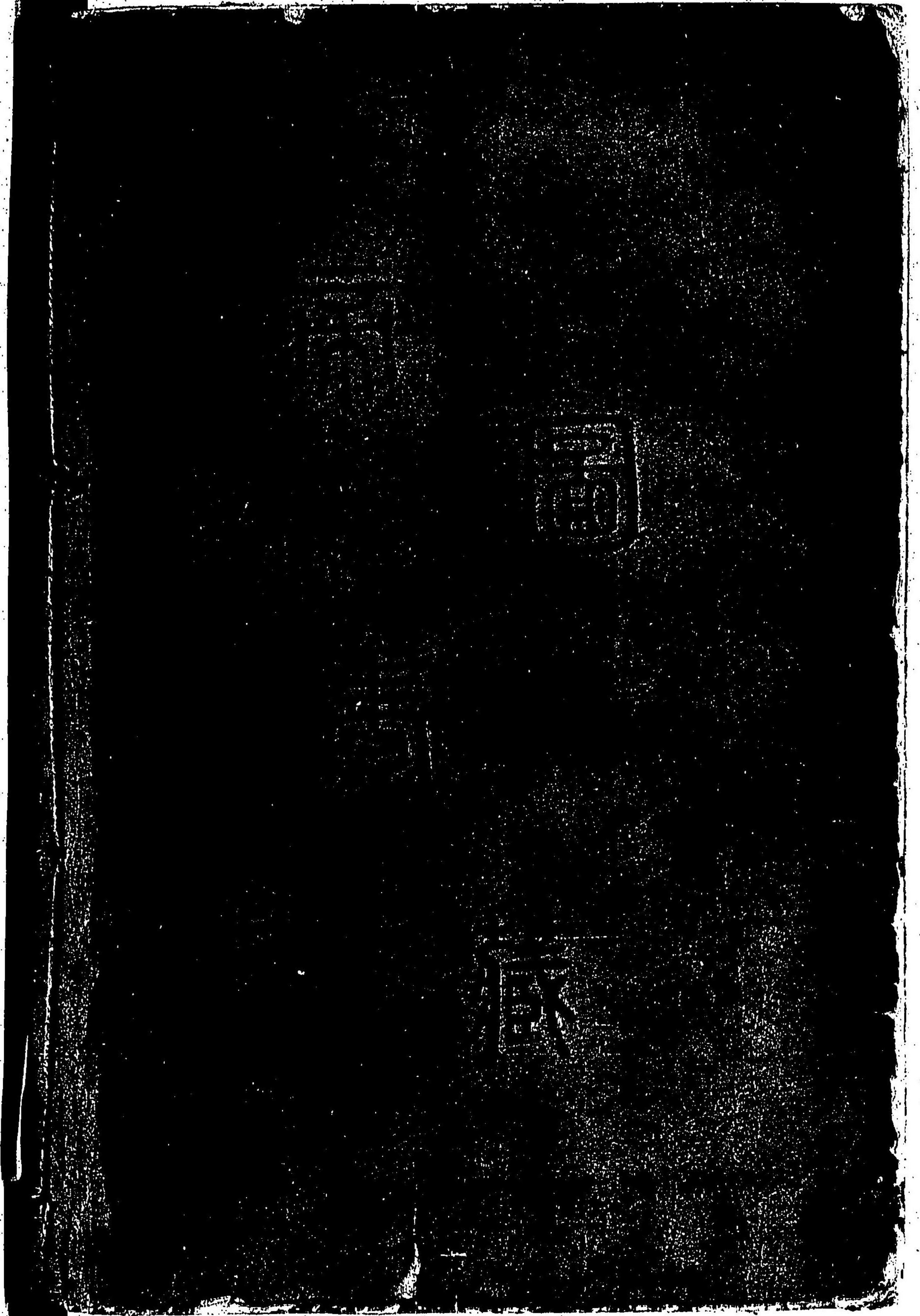
多々良女

たゝらめの花のごと、かいねりこのむや、げに紫の色好むや。

○この歌、政事要略第六十七に見えたる衛門府の風俗歌なりとて高田興清がその著樂章類語鈔卷之四、樂章補闕の部に載せたるものなり。○たゝらめ。その意未だ審かならず。○花のごと、かいねりを好むや。彼女は花を好むが如く搔練の衣を好むよとの意。「かいねり」はよく練りてしなやかにしたる絹をいふ。○げに紫の色好むや。實に彼女は紫衣を好みりとなり。こゝに「紫」と點出したるにて前に「花」とあるは「藤の花」「萩の花」などにてあるべきか。○一

首の意は多々良女は紫の花を好むが如く紫の搔練の絹衣を好むよとなり。その女の姿貌のうつくしさを稱へしまでの歌ならむ。(風俗歌評釋終)

62
398



3 1 0 5 0 4 - 0 0 0 - 0

6 2 - 3 9 8

謡物評釈 催馬楽歌東遊歌
風俗歌評釈

千秋 季隆 述

62

398

早稲田大學三十八年度
文學部教育科教育學講義錄

註的評釋

千秋季隆